

審査論文の要旨

本論は、16世紀におけるドイツの顧問官 **Rat** の変容を考察する。顧問官は、領邦君主が時に応じて領内の貴族に助言を求めたことに由来し、従来の研究は、彼らが君主に仕えながらも、半ば独立した有力な政治的グループを形成していたことを明らかにしてきた。しかし、検討の視野が領邦内に限られていた。他方、市民出身の学識顧問官に注目する研究は、学識顧問官の台頭と貴族出身顧問官の衰退を「領邦の近代化」として図式的に描くが、彼らの「官吏」としての位置付け、領邦の枠を超えた外交活動等については未検討であった。これに対し、本論は、顧問官が「君主の助言者」から「君主の官吏」へと性格を変えた過程を明らかにしようとする。その転換期として16世紀宗教改革対立期を措定し、プロテスタントの中心となるアルベルト家ザクセンとヘッセンに焦点をあて、比較対象としてカトリックのバイエルンとハプスブルク家を取り上げている。

第1章では、各領邦の法令から顧問官が助言者から官吏としての位置づけに変わっていくことが明らかにされる。また、各領邦の歴史的経過から、中央統治の中心に文書管理の長である官房長 **Kanzler** になった場合と、宮廷を取り仕切る宮廷長 **Hofmeister**、侍従 **Hofmarschall** になった場合とがあること、それが宮廷と顧問官との関係の差違となったことが指摘される。

第2章は、顧問官の出自や経歴から人的構成を考察する。その結果、従来16世紀を通じて進行したとされてきた市民出身学識顧問官の台頭が、実際にはそれほど順調ではなかったこと、また、地方統治への顧問官の関与について、顧問官が官吏としての性格を有しても、各領邦の歴史的経過を背景に、依然として封建領主の性格も保持した例が多いことを示す。

第3章は、市民出身の学識顧問官の家系・人間関係を考察し、官房が文書事務に留まったバイエルン、ハプスブルクと対照的に、官房が統治中枢を担ったザクセン、ヘッセンでは市民出身顧問官の門閥形成と世襲化、貴族化の傾向があったことを示す。この事実から、学識顧問官の台頭を領邦近代化とする従来の見解に疑義を呈する。また、アルベルト家ザクセンの内政統治の実態について、地方で実権を握る諸身分に顧問官が取って代わるのは1546～47年のシュマルカルデン戦争後であり、それまでは顧問官は君主よりも諸身分の利害に従って行動していたとする。

第4章は、シュマルカルデン同盟をめぐる交渉を中心に、帝国政治の状況と顧問官の役割変化との関係を検討する。その結果、ザクセン、ヘッセンでは、同盟結成や戦争という外的要因が、領内の統治機構や顧問官の役割変化に大きく影響したことが示される。特にヘッセン方伯フィリップが、各領邦君主に働きかけるため、自他の顧問官を積極的に利用して外交活動を行ったこと、そこに官房長や顧問官が官吏として領邦統治における新たな役割を獲得していった契機を見いだしている。